派遣先所属　　岩手県沿岸広域振興局宮古土木センター
氏　　名　　主査　梶ヶ谷秀之　　主任　草間紀章
派 遣 期 間　　平成 26 年４月１日～平成 27 年３月 31 日

１　派遣業務の内容、現況

派遣先の宮古土木センターは、三陸沿岸にあり「あまちゃん」の舞台として有名になった久慈市と、奇跡の一本松のある陸前高田市の概ね中間の宮古市に所在しています。

また、県庁所在地である盛岡市からは約 90ｋｍ、路線バスで約２時間強の距離にあります。

宮古土木センターでは、道路や河川のほか、防潮堤や港湾施設の整備等を行っており、私たちはここで、道路用地の買収に携わっています。

被災後３年が経過し、既存の道路の復旧は概ね完了していますが、新たな道路整備として、三陸沿岸地域を南北に縦貫する道路と盛岡市などの内陸部と三陸沿岸地域を東西に繋ぐ「復興道路」を核として、災害時でも安全に通行し地域の連携が保つことに加え、物流や観光の産業の支援をも目的とした道路網の整備を進めています。

これらの復興のために行う事業は多大であり、宮古土木センター全体では、他県からの派遣職員を含め、震災前の約３倍となる約１００人の職員で対応しています。

しかし、実際にやらなければならない業務量は震災前の約１０倍となっており、まだまだ人員が不足している状況にあります。

復興のための課題としては、人員不足、資材不足、用地買収の遅れが主なものとなっています。

用地買収を進める中での課題として、土地所有者の中に遠方にお住まいの方が多数いるほか、相続処理が未処理となっているため契約・登記処理が非常に困難になっているものなどがあります。

用地買収の遅れは、事業全体の遅れにつながり、復興に大きな支障をきたしてしまうという重圧がある中、我々用地第２チームでは、職員 8 人で 25 路線、550 人を超える地権者から事業の協力を得るべく用地交渉を行っています。

２　復旧･復興状況や被災地での見聞・感想

被害の大きかった地域もその他の場所も、従前の道路の復旧は終っているため、自動車や人々が普通に往来し、普通に生活をしている様に見えます。

しかし、住宅や商店などの街づくりはまだまだ遅れており、周りを見回せば瓦礫や損壊した建物を取り壊しただけで、浸水した地域では一面の原野が広がっています。

とあるインターネットの動画配信で被災者の方が「テレビは復興に向けて頑張っている姿を流してくれる。でも、テレビカメラの反対側には瓦礫が片付けられただけで、復興には程遠い、手付かずの土地が広がっているところには何も映してくれない。」とのコメントはまさにその通りだと感じています。

宮古市内のほとんどの公園には、震災から３年半を経過した今でも多くの仮設住宅が立ち並び、まだまだ大勢の被災された方が居住されており、２世代、３世代同居の方も少なくありません。

民間アパートの建設も少なく、沿岸地域に勤務する岩手県の職員、他県からの応援職員の多くは被災者が引っ越しをして空いた仮設住宅に居住しています。

仮設住宅の標準的な間取りは６帖２間に台所の２Ｋです。テレビでも報道されたとおり、隣世帯のテレビの音や会話が漏れ聞こえ、足音や床に置いているであろう携帯電話のバイブレーションの振動も響くなど、長く住んでいる方や家族で住んでいる方は落ち着いた生活ができない状況にあります。

岩手県内では災害公営住宅の整備の進捗率は現在約２０％です。着工中のものも多くあるほか、被災地の高台移転計画や区画整理事業も進んでいると聞いておりますが、落ち着いた生活を取り戻すには、まだまだ時間がかかる様に思います。